

日本組織培養学会

昭和56年 7月20日発行

会 員 通 信

第 4 4 号

発行責任者

小山秀機（癌研）
松村外志張（東大・医科研）
丸野内棟（三菱化成・生命研）
伴 貞幸（放影研・広島）
東京都豊島区上池袋1-37-1(〒170)
癌研究所・生化学部
電話 03-918-0111 内線2649

§ 昭和56, 57年度幹事選挙の結果について

3月20日、常盤および内海選管幹事が岡山大学医学部において開票を行ない、次のように新幹事を決定しました。なお投票総数は97票でした。

東 部	当 選	小 山 秀 機 (癌 研)	34 票
	"	大 野 忠 夫 (放 医 研)	25 "
	次 点	筒 井 健 機 (日 齒 大)	15 "
西 部	当 選	加 納 良 男 (神 戸 大・医)	21 票
	"	井 出 利 憲 (広 島 大・医)	17 "
	次 点	大 西 礼 子 (阪 市 大・医)	14 "
	"	伴 貞 幸 (放 影 研)	14 "

この結果、昭和56年度幹事は、三井洋司（都老人研）、角屋堯英（独協医大）、宮沢字彦（愛知がんセンター）および常盤孝義（岡山大・医）の各幹事と、上記4名の新幹事ということになりました。

（選挙管理委員長 常盤孝義）

§ 第51回総会議事録

第51回総会は、第51回研究会（世話人：沖垣達会員）会期中1981年5月22日に行なわれた。旧幹事長、丸野内棟会員により、議長として松村外志張会員を選出した。ついで新幹事長の小山秀機会員、および新幹事の大野忠夫、加納良男、井出利憲、各会員の紹介があった後、議事に入った。

総会議事および承認事項の概略は次のとおりである。

1. 新入会員の紹介：正会員15名、賛助会員2名を承認した（氏名、所属は別業に記載）。
2. 会計報告：山田正篤会計委員より昭和55年度の会計報告が行なわれ、承認された（別項1参照）。

さらに今年度の予算および会計事務に関して次の項目が報告され、承認された。

- 1) 昭和56年度も会計事務を日本学会事務センターに委託する。
 - 2) これまで別窓口となっていた特別会計事務も、同センターに委託する。
 - 3) 今年度特別会計より、本研究会の招待講演者 Stiles 博士に20万円支出する。
 - 4) 同会計より国際細胞生物学会議に、援助金として10万円寄付する。
 - 5) 2年以上の会費滞納者（14名）には、もう一度督促し、納入なき場合は退会とする。
3. 会計委員の交代：長年にわたり会計委員として重責を担ってこられた山田正篤会員が、校務多忙につきその職を辞退され、新しく梅田誠会員を会計委員に任命した。
 4. 日本組織培養学会会則整備について：規約整備委員会の山根毅委員長より、同委員会と幹事会で

作成された改正案が提出された（別項2参照）。ついでこの改正案の賛否は会員通信44号に同封する投票用紙を用いて、投票により行なうとする幹事会の提案が承認された。会員はもれなく投票されたい（次項参照）。

5. ビブリオグラフィーの廃止：会員通信第43号でビブリオグラフィー存続可否について、投票を行なった結果、存続12名、廃止77名で、廃止が決定され、承認された。これにともない、いくつかの残務処理が報告された。
 - 1) 1981年版から廃止する。
 - 2) 1981年度も発行予定で、ビブリオグラフィー担当委員の乾直道会員から文部省あてに定期刊行物補助金申請が昨年11月になされていた。しかし、上の決定にともない、その申請を辞退することとし、その手続を同委員に依頼した。
 - 3) これまでビブリオグラフィーを送付していた外国会員、その他および国内非会員には、廃止の通知書を送る。
 - 4) 1980年の第49回研究会および第50回研究会の抄録は演者に返却する。
6. 新学会誌の発行：これまではビブリオグラフィーが学会誌として機能していた。しかしその廃止とともに新しい学会誌の発行が必要となった。これは日本学術会議の学会の定義として学会誌を発行しているという項目を満たすためである。そこで、従来研究会の世話人により発行されてきた研究会の抄録集を、形式をあらためて新学会誌として学会が発行することに決めた（別項参照）。
7. 各委員会報告：
 - 1) 組織培養用語集編集委員会
黒田行昭委員長より、今年の委員会活動の報告が行なわれた（別項参照）。
 - 2) 研究教育システム委員会
梅田誠委員長より、実習書として「組織培養の技術」を本年度中に出版する見通しが報告された（別項参照）。
8. 会員通信の発行委員の交代：約2年半にわたり、第37～44号まで会員通信の編集を担当してきた小山秀機、許南浩（在ドイツ）、村外志張、丸野内楳、伴貞幸各会員が44号をもって辞退し、45号から三井洋司会員を中心に発行することが承認された。
9. 培養器材の一括購入方式の導入：最近の培養器材の高騰は著しい。そこで学会活動の一部として、すでに免疫学会で実施されてきた培養器材の一括購入方式を導入することが承認され、その委員として角屋幹事を任命した（別項参照）。
10. 第52回研究会の世話人真泉平治会員より、第52回研究会および「実験技術講座」の企画、また特別講演の演者として John Hopkins 大学の Paul Tsó 博士を決定したことが報告された（別項参照）。
11. 第53回研究会の世話人中沢恒幸会員より第53回研究会について説明があった。

（常盤孝義，小山秀機）

別項：日本組織培養学会昭和55年度会計報告

前年度よりの繰越金	454,867円	55年度支出	1,696,913円
55年度収入	1,984,200	次年度への繰越金	742,154
計	2,439,067	計	2,439,067

昭和55年度収入		昭和55年度支出	
正会員費	756,400円	会誌発行費	296,320円
賛助会員費	850,000	(会員通信 41, 42, 43)	
入会金	37,000	会誌発送費	258,140
文部省刊行補助金	330,000	通信費	121,360
雑収入	10,800	印刷費	274,440
		業務委託費	500,843
		研究会補助金	200,000
		雑費	45,810
計	1,984,200	計	1,696,913*

* (未払金) ビブリオグラフィー'79 784,800円
△ 42,646

収入に関しては、正会員の納入率は90%を越えている。2年以上滞納の人は、本人に確認の上退会していただくことに幹事会で決った。

支出に関しては、昨年度の支出と比べ、印刷費、郵送費が値上りしている他はあまり変わっていない。次年度繰越金が74万円余と昨年度より増加しているが、'79年度のビブリオグラフィーの支払いが済んでいない。'79年度のビブリオグラフィーは78万5千円支払っているの、これを支払えば赤字になる。このことを見越して、56年度より会費を3千円に値上げしてある。

特別会計は、前年度繰越金が673,149円。55年度収入は、利息14,822円と、合同酒精株式会社からのディスパーせ売上金の一部65,200円、計80,022円。支出はありませんでした。したがって、次年度への繰越しは、753,171円となっている。

(会計委員、山田正篤)

§ 日本組織培養学会会則改正案に対する賛否の投票

1. 会則整備の経緯

25年前、少数の先達によって結成された日本組織培養学会は、幾多の困難を乗り越え、次第に数多くの研究者を育成しかつ包括しながら今日に至っている。本学会はその間、日本国内外の組織培養研究の発展と充実に貢献してきた。今日400名を越す会員の参加を数えることは、まさに本学会の繁栄の一側面を物語るものと考えられる。この発展に伴って会の性質が初期の頃より変化してきた点もまた認めざるを得ない所となった。"学問的には厳しくかつなごやかに", また"少ないお金で質素であってもやれるだけのことをやる"というこの学会の良い流れを維持しつつ、運営をより円滑に行なうという要望が数年前から一度ならず論議されてきた。大げさに言えば学問の国際的動向、あるいは研究者の意識の変化を反映したこの問題の基本的解決のためには、まず本学会の規約を整備する必要のあるこ

とが提案され、そのためのワーキンググループ（WG）の発足が第47回総会（1979年）で承認された。WGは会の運営に関するさまざまな意見を会員諸氏から聴取し、現行規約中整備すべき問題点の検討を行なった。

第49回総会（1980年）において、WGの活動を受けて規約整備委員会の発足が認められた。当委員会の作成した最初の会則案は会員通信第41号に掲載された。この案の作成にあたっての主な問題点は、会長の新設、幹事の定年制、幹事の東西地区区分、および会則（総会決議）と細則（幹事会決議）の分離などであった。特に幹事の定年制の存続・廃止に関しては、任期後の免疫期間の長さをも含めて十人十色の意見があり、容易に結論を得ることができなかった。

第50回総会に提出した第二次案では結局、定年制存続と廃止との折衷案ともいべき形になった。しかし幹事の定数を40才以上4名、40才未満4名と規定した項を会則に入れるべきかどうかで意見が別かれ、結論にいたらず、再度規約整備委員会で検討しなおすことになった。

今年5月の第51回総会の前に、規約整備委員会の再検討案を受けて幹事会と合同で検討し、第三次改正案を作成した。この第三次案は5月22日の総会に提案され、内容については異議がなかった。

改正案および要点は以下に示した。しかし、前会則には規約改正の手続きが不明瞭であること、また問題が極めて重要であることから、今回に限り会員の投票によって決定すべきであるとの幹事会の提案が受け入れられ、会員諸氏に投票で改正案に対する賛否を問うことを議決した。

2. 日本組織培養学会会則改正案に対する投票の方法

第51回総会での決定に基づき、同総会で提出された日本組織培養学会会則の改正案に対する賛否を投票で決定します（改正案および改正の要点は、下を参照のこと）。投票用紙の改正案に「賛成」あるいは「反対」のどちらかに○を付し、同封の封筒に入れて郵送してください。

記名投票で、投票総数の過半数により決定します（無記名は無効）。

締切りは8月10日（土）（消印有効）です。

3. 改正案の要点

- (1) 会則（変更は総会の議決による）と、細則（変更は幹事会の議決による）とを設けた。
 - (2) 会長一名を新設した。正会員の直接選挙により選出され、任期は4年（会則）で、再選は禁止（細則）される。
 - (3) 幹事は40才以上4名、40才未満4名とし、任期は2年とする（会則）。幹事は任期後4年間幹事の被選挙権を有しない（細則）。
 - (4) 東西地区区分を廃止する。
 - (5) 会の事業のうち年次業績集（ビブリオグラフィ）の編集発行を定期刊行物の発行・配布に変更する。
 - (6) 事務局は日本学会事務センター内とする。
- ## 4. 日本組織培養学会会則（案）および細則（案）

<次頁参照>

日本組織培養学会会則（案）

第1章 名 称

第1条 本会は、日本組織培養学会（The Japanese Tissue Culture Association）と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、組織培養およびその応用の進歩発達に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、本会の目的を達成するためにつきのような事業を行なう。

1. 年1回総会を開く。その他必要に応じて臨時総会を開くことができる。
2. 原則として年2回研究会を開催し、学術上の研究成果の発表および知見の交換を行なう。
3. 必要と認められた定期刊行物を発行し、会員に配布する。
4. 国内および諸外国の関係学術団体および国際団体との連絡ならびに協力をはかる。
5. その他、本会の目的達成のために、必要と認めた事業を行なう。

第3章 会 員

第4条 本会の会員は、正会員、名誉会員、賛助会員とする。

1. 正会員は、組織培養およびその関連領域の研究に従事する個人で、本会の目的に賛同し、定められた会費を納めるものとする。
2. 本会の育成、組織培養の進歩に著しい功績のあった正会員を名誉会員として推薦し、会費を免除する。推薦は、幹事会が行なう。
3. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、定められた賛助会費1口以上を納める個人または団体とする。

第5条 特別の理由なく、引続き2年以上会費を納入しない正会員は、除名することができる。

第4章 役 員

第6条 本会は次の役員をおく。

会長1名、幹事8名、会計監査2名

第7条 会長および幹事は、細則の定めるところにより、正会員の中から正会員の投票により選出される。会長の任期は4年とする。幹事の定数は40才以上4名、40才未満4名とし、任期は2年とする。

第8条 幹事会は会長および幹事によって構成され、会務を運営する。

第9条 会長は、本会を代表し、会務を統轄する。特に対外活動に関して責任を負う。

第10条 会長はその職務の補佐のため、正会員の中から庶務1名、会計1名を指名することができる。任期は2年とし、重任は妨げない。

第11条 会計監査は、会長が幹事をのぞく正会員の中より委嘱する。任期は1年とし、重任は妨げない。

第12条 幹事会は、研究会の開催地および世話役を決定し、委嘱する。

第13条 幹事会は、本会に必要と認める専門委員会をおくことができる。

第5章 会 計

第14条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。

第15条 研究会に要する経費は、別にこれを徴収することができる。

第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日より始まり、翌年3月31日をもって終わる。

第6章 会 議

第17条 総会、幹事会は会長が招集する。これらの会議の議事は、出席者の過半数の賛成を得て決定し、可否同数の時は、議長がこれを決定する。

第7章 会則変更

第18条 本会会則の制定変更は、総会の議決を経る必要がある。

附 則

1. 本会の入会金は1,000円、会費は年額、正会員3,000円、賛助会員1口10,000円とする。
2. 本会則は昭和 年 月 日から施行する。

日本組織培養学会細則（案）

第1章 会 員

第1条 本会に正会員として入会を希望する者は、日本学会事務センターより所定の用紙（入会申込書、および会員名簿整理表）を入手し、記入の上、日本学会事務センターへ送付する。申込みには、本会会員2名の推薦を必要とする。

第2条 入会の承認は、幹事会で行なわれる。

第2章 総 会

第3条 総会では、本会の事業計画、収支決算が審議される。また、本会の役員人事に関する報告が行なわれる。

第3章 役員を選出

第4条 役員を選出はつぎのとおり行なう。

1. 会長は、幹事のなかから2名の選挙管理委員を委託する。
選挙管理委員は、選挙事務を行なう。
2. 会長の投票は、正会員が無記名、郵送によって行なう。
3. 会長の再選は禁止する。幹事会は、会長候補を推薦することができる。
4. 幹事の投票は8名連記、無記名、郵送によって行なう。40才以上および40才未満について、得票数の上位各4名を選任する。
5. 幹事は任期後の4年間、幹事の被選挙権を有しないものとする。

第4章 幹 事 会

第5条 幹事会は年2回開催する。但し、会長が必要と認めた時、または幹事の3分の2以上が開催を要求した時は、臨時幹事会を開催することができる。

第5章 事 務 局

第6条 本会の事務局は、日本学会事務センター（〒113 東京都文京区弥生2-4-16）内とする。

第7条 入会金および会費の送付先は日本学会事務センターとする。

第6章 細則の変更

第8条 細則の変更は、幹事会の議決による。

第9条 本細則は、昭和 年 月 日より実施される。

（幹事長 小山秀機）

§ 新しい学会誌の形式

総会議事録で記述したように、今後研究会の抄録を学会誌としてその形式を整えることになった。この問題について在京幹事（小山、角屋、大野）およびオブザーバーとして丸野内楳、松村外志張、筒井健機会員が6月16日あつまり、討議した。ついでその骨子を持ち廻り幹事会で審議した結果、次の点で合意に達した。ただし、次の総会で報告し、承認を得る予定である。

その合意事項は、

1. 第52回研究会抄録集を準備号として発行する（従って、次研究会抄録集を参照されたい）。
2. 学会誌の名称を「組織培養研究」とし、英文名をTissue Culture Research Communications とする。
3. 表紙にはさらに日本組織培養学会、Japanese Tissue Culture Association および第〇回研究会抄録集と入れる。
4. 来年度より第1巻、第1号として発行する。
5. 会誌の目次は各講演の表題、演者名、所属とする。内容となる各抄録には和文、英文両方で表題、演者、所属を記し、これに和文タイプした抄録文を付する。巻末に英文の演者名索引をつける。

（幹事長 小山秀機）

§ 組織培養用語集編集委員会の活動状況

国立遺伝研 黒田行昭

日本組織培養学会用語集作成委員会は、日本植物組織培養学会の協力を得て「組織培養用語集編集委員会」と名称を改め、両学会より計13名の委員により、収録する用語項目の選定その他用語集作成に関する作業を進めてきました。これまでの経過は会員通信第40号6—7頁および第42号6—7頁でお知らせしましたが、その後の委員会の活動状況はつぎのとおりです。

1. 第4回組織培養用語集編集委員会

昭和56年2月14日、東大医学部好仁会において開催。つぎのことを決定した。

- 1) 項目数は動物組織培養関係1,000項目、植物組織培養関係450項目、索引項目350項目、合計1,800項目となる。これをコンピューターに入れ、動物と植物相互の重複を除く。
- 2) 親項目は大、中、小の3ランクに分け、大項目（約800字）は100項目、中項目（約400字）は250項目、小項目（約200字）は1,100項目となる。これらの本文のほか、付録、索引を加えて印刷頁300頁の本となる。
- 3) 書名は「組織培養辞典」とし、本の体裁は四六判、並製（ケース入）とする。
- 4) 「執筆依頼状」「刊行の趣旨」「執筆の手引」「執筆のカード」などを作成した。
- 5) 単位系は「動物学雑誌投稿規定」を、外来語は「生物学辞典」を参考にする。

2. 第5回組織培養用語集編集委員会

昭和56年4月30日、東京・学会分館（本郷）において開催。つぎのことを決定した。

- 1) 各項目の執筆者の選定は、各委員が編集担当者となって、各分野の相談役と協議して決定し、6月上旬に執筆依頼状を発送し、原稿の締切は9月とする。

- 2) 原稿が集った段階で、各項目の調整や、協議の必要な事項の検討を行ない、本年11月に昭和57年度の文部省印刷費補助金の申請を行なう。
- 3) 原稿料については、文部省補助金との関係もあり確定できないが、両組織培養学会と各執筆者や編集者に配分する案が出された。

§ 「組織培養実習書」の執筆状況

横浜市大・医 梅田 誠

研究教育委員会で手がけている「組織培養実習書」は、体裁や用語の統一などの作業を終え、やっと原稿を印刷所にまわす段階に達しました。書名は「組織培養の技術」と決め、本年度中には刊行できる目安となりました。

なるべく大勢の人達に利用していただくため、内容には付録などで参考になる項目を集め掲載したり、また、安価にするのも大切と考え、資料編として業者の方々に広告をのせていただくことなどを検討しています。

特に会員諸氏には、割引きで入手できるような方法を考えています。次号には、はっきりとした刊行のお知らせができると思います。

§ 培養器材の一括予約購入について

ご存知の方もいると思いますが、日本免疫学会細胞培養委員会がプラスチック製品の一括購入を行なっています。前学会の総会でお伝えしましたように、本学会でも会員の皆様がプラスチック製品をできるだけ廉価で入手できるように、一括予約購入（半年契約）の方式をお世話をすることになりました。この購入方法を簡単に説明します。申込書を8月20日頃迄にお手元に送付しますから、会員の皆様は必要数を記入（月別毎、56年11月～57年4月）して9月20日までに角屋あてに返送してください。私が申込書を取りまとめて直接業者に渡します。以後は業者が直接会員の皆様に連絡をとります。申込要領を申込書と同封して送りますから、それに従ってご記入願います。

取扱う製品は、Corning, 住友ベークライト, NUNC, Falcon, Lux 社のものです。

各社の申込書は色分けしてわかりやすいようにしてあります。この購入方法全般についての問い合わせ、および苦情などがありましたら角屋あてに連絡してください。申し込み数を把握したいので、直接業者に申し込まないようお願いいたします。また、11月からにしたのは、準備・印刷・発送などから考えて10月からは無理なこと、日本免疫学会と時期をずらす（両学会に3社が関与している）などの諸点からです。

今後の予定としまして、来年から血清の一括予約購入を開始したいと思います。その他、扱ってほしい製品がありましたら連絡してください。なお、反町会員に手伝っていただくことになりました。

連絡先： 角屋堯英 〒321-02 栃木県下都賀郡壬生町字北小林 880

独協医科大学第一病理学教室

Tel (0282) 86-1111 内線 2182

§ 日本組織培養学会第52回研究会のご案内

第51回研究会は倉敷のアイビースクエアの落ちついた雰囲気の中で開催されました。

次回第52回研究会の開催地は文化的貧困都市東京でありますので、ゆきとどいたサービスができず、世話人は肩身のせまい思いをしております。

そこで会員諸兄姉ならびに来会非会員の皆様の日常の実験技術について寄与できるような企画をたて、責任を果たそうということになりました。

時間の関係でテーマの数を制限しなければならなかったのは残念ですが、「実験技術講座(仮称)」が研究のお役に立てば幸甚です。

また特別講演には Johns Hopkins 大学の Dr. Paul Ts'o が来日され、下記の演題で講演されることになりました。

一般演題につきましても、最新の研究成果を多数発表していただき、日本組織培養学会の研究会らしい盛りあがりが見られるものと期待しております。

多数の演題を提出していただきますよう、そして多数の方々が参加されますよう、お待ちしております。

記

1. 会場：東京都千代田区平河町2-7 全共連ビル (第50回研究会と同じ会場です)

2. 会期：昭和56年10月28日(水)～29日(木)

3. 参加および講演申し込み締切：昭和56年8月10日(月)

参加および講演希望者は別葉の申し込み票に記入の上、下記の申し込み先へお送りください。

4. 抄録原稿締切：昭和56年9月5日(土)

5. 参加申し込み先および連絡先：日本歯科大学薬理学教室

〒102 東京都千代田区富士見1-9-20 電話(03)261-8311 内線287, 288

(世話人) 真泉平治(まいずみへいじ)

(準備委員) 筒井健機(つついたけき), 長谷川紅子(はげがわこうこ)

6. プログラム

1) 特別講演：Dr. Paul O. P. Ts'o

Dept. of Biochem., The Johns Hopkins Univ.

Baltimore, MD 21205

"Recent Progress in the Study of Neoplastic Transformation"

2) 一般演題(口演および示説)：公募

3) 実験技術講座(仮称) 各課題名は多少変更することがあります。

☆ DNA鎖切断の鋭敏な検出法(アルカリ・エルーション法その他)

渡辺正己氏(金沢大・薬・放射薬品化学)

☆ 哺乳類細胞のDNAファイバー：オートラジオグラフィ

堀 雅明氏(放医研・遺伝)

☆ 培養細胞へのマイクロインジェクションの新しい技術

古沢 満氏(大阪市大・理)

☆ Counter Current Elutriator と FACS の使用

— 血液幹細胞の分離を中心に —

井上 達氏 (東京都老人研・基礎病理)

☆ ラット肝環流とその単離肝細胞の初代培養

宮崎正博氏 (岡山大・医・癌研病理)

☆ 成人肝細胞の単離とその初代培養

宮崎耕治氏 (九大・医・第一外科)

☆ 器官形成期の胎児培養

江藤一洋氏 (東京医歯大・顎口腔総合研)

☆ 初期胚の培養

花岡和則氏 (三菱化成生命研・発生物)

☆ 培養細胞の走査電顕用染色体標本の作製

飯野晃啓氏 (鳥取大・医・第一解剖)

☆ そのほかは交渉中

7. 研究会参加費：会員 3,500 円，非会員 4,000 円

8. 懇親会参加費：3,500 円

9. 交通：都 バ ス……平河町 2 丁目都市センター前下車 (徒歩 2 分)

地 下 鉄……有楽町線永田町下車 (徒歩 3 分)

銀座線，丸ノ内線赤坂見附下車 (徒歩 7 分)

国 電……四谷駅下車 (徒歩 15 分)

タクシー……四谷駅より 5 分，東京駅より 10 分

10. 宿泊：各自で手配してください。

(第 52 回研究会世話人 真泉平治)

§ 第 3 回国際細胞生物学会議 (ICCB) へ向けて (2)

三菱生命研 丸野内様

第 3 回 ICCB の準備が着々と進んでいます。先日の準備委員会で次の点が決定されましたので、お知らせします。

1. 会期：1984 年 8 月 26 日～9 月 1 日

2. 場所：東京 京王プラザホテル

3. プログラム委員長：阪大・徹研 岡田善雄氏

3. に関連して、本年度の細胞生物学会 (11 月 19～21 日，名古屋) の期間中にプログラム委員会がひらかれます。したがって、組織培養学会として、また個人、グループでも、取上げて欲しいテーマ、その他の意見をお聞かせください。

なお、上の ICCB 会期前後にサテライトミーティングやワークショップ等がひらかれますが、その企図についても同様にお願いします。

連絡先： 三井洋司 〒173 東京都板橋区栄町 35-2

東京都老人総合研究所

§ 第51回研究会を終えて

重井医研・細胞生物 沖垣 達

国際シンポジウムを含めて、まことに盛会であった前回の運営と成果を十分考慮して作製したプログラムのもとに、第51回研究会は5月21, 22の両日倉敷市美観地区アイビー・スクエアで開催されました。

今回は、研究会=勉強会と考え、二つのシンポジウム（I. 成長因子：オーガナイザー 山根 毅・大野忠夫両会員，II. 腎培養の問題点：オーガナイザー 佐藤温重会員）を中心に、お二方（阪大 磯研 岡田善雄会員，Harvard 大 C. D. Stiles 博士）に特別講演をお願いすることもできました。その結果、一般講演を二会場で同時に進行するという、本学会としては珍しい形式になりましたが、今のところどこからのおとがめもなく、全体的にはスムーズな進行となりました。

運営に関しては、最大限に無駄をはぶくことを目的として、演題表示スライドの常時映写、赤青の制限時間指示ランプ、大会本部室、来賓室等の設営を一切はぶいて経費の軽減をはかりました。

出席者は正会員86名、非会員156名、それに招待者や内輪を加えますと300名を越す盛会になりました。非会員の参加者がきわめて多かったという事実は、当学会の運営の将来計画とも深く関わっていると思います。

会場があたかも柳糸の堀河に映る五月の白壁の里にあり、かつ宿泊設備と懇親会場も備えているというロマンとプラクティスが相まって、有意義な楽しい研究会であったというお言葉を頂いて光栄に存じております。個人的には、この環境は3年後の国際細胞生物学会議のサテライト会場のひとつとして使えるのではないかと考えつつ、後始末をしたような次第です。

終わりに、全国から参加された方々、発表や企画にお力を頂いた方々、座長職をかってくださった会員諸兄、多大の御協力を賜った培養関連企業各位、そして裏方を演じてくれた我が郎党諸君に心から感謝の意を表し、これをもって世話人の職責を完了させていただきます。

§ 第29回ヨーロッパ組織培養学会印象記

東北大・医・第2外科 赤石 隆

アムステルダム郊外のスキポール空港に受付が設置してあると聞いていたので捜したが、小さな看板がポツンと立っているだけで人影がない。キョロキョロ周囲を見回していたら、遙か遠くから椅子に腰かけていた男性がやってきて握手を求めた。この簡素な受付は、学会の性格を物語るものであった。

空港から学会関係者の運転するライトバンで40分程、風車のあるのどかな田園風景の中を走った所に会場があった。16世紀から数年前まで船乗りの学校であったとかで、古めかしいが派手でない建物だった。あたり一面はチューリップの球根畑で、花が目的でないため大部分は落としてあった。とは言っても、残った区画の花の色鮮かだったのは、今だに忘れられない。

5月13日から15日までの学会で、参加者は176名。半数以上が女性だった。米国、イスラエル、東欧のポーランド、ハンガリーからも参加があった。演題数は95。ポスターセッションが大半で、大会議場では各示説からテーマ別にまとめて口演、映画、ワークショップが行なわれた。多少私は戸惑ったが、参加者の多くが演題を出すという状態では、このような形を採らざるを得ないとも思われた。

内容は実に多彩で、各人各様独特の培養法を駆使していた。個人的印象では、培養した細胞の同定にかなりの力点がおかれており、その方法として細胞に由来組織の機能を発現させるという試みが多かった。また培養環境を生体に似せて構成するなど、現在の日本では珍しい方法をとるものもあった。さらにその延長線上に（逆の方向だが）遺伝形質の発現が如何に行なわれるかという研究が、*Men-dlism. hybrid cells, recombinant DNA* を用いて行なわれていた。

14日の午後はオランダの古都 Gauda（ハウダと発音）へ遠足である。「皆さんが見物なさっている間に、後から来る人々は血清不足について討議しておきま—す。」案内人の彼は翌日 *Somafic cell genefics* の session で講演していた。明朗な音声と明瞭な発音。これは私が会ったオランダ人の皆から受けた印象である。彼らは英語が非常にうまく、快瀾である。

その夕の懇親会では郷土芸能の紹介を兼ねて、木靴作りとレース編みの実演があった。薪割りで割ったようなゴロンとした材料から、鉤のような形のノミで素晴らしい速さで靴ができてゆくのは見事だった。日本から同行した西平氏が、やってみろと言われて皆の注視の中で試みたが、どうもうまく行かない。何の木ですかと尋ねると屈強な大男は *Will ow* と答えた。我々がきょんとしていると「ヤナギ」と言ったので驚いた。聞けば彼は天皇陛下の前で木靴を作製した事があるのだそうだ。

挨拶に立った Leiden 大学の Gillard（ガイヤールと発音）教授は、彼が培養を始めた頃すなわち 1920 年代に Carrell 先生は、Fischer 先生は、とやり出したので対応する歴史を持たぬ我々は少し面喰らった。本学会の伝統を物語る一幕であった。アトラクシオンでチーズ（日本の鏡餅のような）の重さ当てを全員で行なったが、これは私の妻が主婦の面目（？）を示し一等賞を頂戴した。

ヨーロッパの人々は、「古くから現在に至るまで各自の歩調で研究を進めつつある」というのが私の感想である。

生まれて初めての日本での学会発表が因で、このような学会で発表する事となった私の狼狽は書く必要もありませんが、機会を与えて下さった方に感謝いたします。

§ 編集後記

2年半にわたりこの通信の編集を担当しました。今、ほっとしているところです。いつもながら、出版物の編集は難かしく、仲々うまくいかないものです。いくつかの新企図もたてましたが、実現しませんでした。また討論の場を提供したいと考えていましたが、討論すべき問題がどこからも持ち込まれませんでした。結局、学会の通信誌として、学会活動をなるべく詳細に記載していく方針で編集した次第です。次号からは三井洋司会員を中心に発行されますが、漸新な企図でより充実した通信が発行されることを期待しています。

最後にともに編集にたずさわった発行責任者の方々、原稿を送っていただいた会員の方々、印刷・発送を担当していただいた日本学会事務センターの方々に、心からお礼申し上げます。（H.K.）